

文庫増補章

その後の Title

## 五井田の Title

月日が経つのは早いもので、このちくま文庫版が出る一〇二〇年一月には、Title をはじめて五年目の日を迎えることになる。毎日数万円のお金を出し入れする程度の小さな店だが、気がつけばここまで続けることができた。

日々のルーティン作業は、開店したころから変わっていない。朝の八時に「毎日のほん」を更新し、荷物のない日曜日を除けば開店一時間前には店に来て、棚に商品を並べる。店の開店後は一日レジカウンターのなかで、接客や仕入、本の紹介などの仕事をして、夜九時になつたら店を閉める……。

商品のレイアウトも、店をはじめたときとまつたく同じだ。入つて左には暮らしの本と子どもの本、右にはアートや文学、人文哲学などの本を置き、真ん中には新刊やTitle での売れ筋を並べた平台と、文庫専用の可動式什器がある。レイアウトは変わらないが、新刊の出し入れに合わせて、並べている本の内容だけが日々変化する。この店が同じ姿で変わらないことが、これまで Title を続けてきたなかで、もつとも誇

るべきことだと思つてゐる。

店を開けている時間は、開店した年に比べれば短くなり、二年目からは朝の開店時間は、一一時から一二時へと一時間遅くした。それはその時間店に来る人が少なく、近所に住む年配のかたが中心の時間帯でもあったので、時間をずらしてもその人たちは来てくれるだらうと判断してのことだつた（夜の閉店時間を一時間早めるということも考えたが、その時間にしか来ることのできない人もいて、それは断念した）。開店一年目は、定休日以外無休で営業を続けたが、二年目からはお盆休みの前後で夏休みを五日ほど取るようになり、春と秋にも三連休を一度ずつ取ることにした。

そのときは売上が減ることも考えたが、Title のように目的を持つて来店する人が多い店では、事前に休みを告知しておけば、お客さんはそれにあわせて来てくれる。それに休みをしつかり取つたほうが日々の気持ちが安定し、店を長く続けていくうえではよいことだと思う。

こうした長期の休みは、その年の最初に年間を通して決めてしまう。前もつて決め置かないと、そのときの売上状況によつては休むことをためらつてしまふときもある

るかもしれないし、展示やイベントのスケジュールは日々入ってくるので、直前では休みが取れなくなってしまうからだ。

そうした休みの日には、極力街に出るようにしている。店にいるあいだは定点での仕事を続けているので、外で様々な人の顔に触れ、話題の美術展や新しくできた店に行く時間がないと、自分の感性が時代と合わないものとなり、本を見たときの判断が鈍るような気がしている。

この間一番変わったことは、店に来るお客さんの顔ぶれだ。店の開店時にはよく見かけた「どんな店か見てやろう」という人や業界関係者は、最近では見ることがない。多くのお客様が入ってくることはなくなったが、Title が行うことや並べている本に対し共感を持つて来てくれる人がほとんどなので、店としては健全な状態になつたと思う。

毎週土曜日の昼間、りんごジュースを飲んで帰る初老の男性、子ども向け雑誌の発売日に合わせ、月に一度だけ来店する女性。会社帰りに立ち寄つて一瞬のあいだに二、三冊本を選んで帰るサラリーマン……。近くに住む多くの人の名前を知るようになり、

本を渡す際にはひととこと会話を交わすようになった。

以前は店にもよく来られていたが、すでにお亡くなりになつた人もいる。わたしはその人生の最後のほうに関わつただけだが、ご遺族のかたから話を聞き、お礼を言わることはつらい。

そのほか、店の近くからは引っ越してしまつた人、店の近くに引っ越してきた人。引っ越しの際、違う県に行くけどこれからも Title には定期的に通いたいという人がいて、ほんとうにまた来てくれたときは嬉しかつた。

妻もわたしと同じで、毎日カフェに立つてゐる。こうした日々に付き合つてくれて、彼女にはとても感謝している。三年前から、家には猫のてんてんが加わつた。人間世界とは一切関わりがなく、その小さな体がすべてである猫がいることには、とても救われている。

店からの帰宅後は、わたしも妻も争うように、てんてんをかわいがつてゐる。